

観照と行動

——ワイルドの美学におけるアナキズム

鈴木 英明

1886年5月、アメリカ合衆国シカゴで労働者たちが8時間労働制などを求めてストライキを行っていたところ、労働者の4名が警官によって殺害された。これに抗議するデモがシカゴのハイマーケット広場で行われているときに爆弾が爆発し、警察側と労働者側それぞれに数名の死者がでた。いわゆるハイマーケット事件である。この爆弾事件の犯人として、十分な証拠もないままに9名のアナキストが起訴され、このうちの7名に死刑が宣告された¹。これらのアナキストに対する死刑執行の猶予を求める労働者の国際的な署名運動が行われ、Bernard Shawによれば、ショーがこの署名への協力を呼びかけたなかで実際に署名したのはOscar Wildeただ一人だった²。このほかにも、ワイルドとアナキズムとの近接性をうかがわせる事例にはこと欠かない。フランスの雑誌 *L'Ermitage* の1893年7月号と11月号で、「社会の幸福のためのよりよい条件として、自由で自発的な組織と規律と秩序ある組織のどちらがよいか。芸術家はどちらを好むべきか」と問うアンケートがフランス内外の文学者を対象に実施され、これに対してワイルドは次のように答えている。「かつて私は詩人で専制君主でした。今では芸術家でアナキストです」³。さらには *De Profundis* (1949)において、ワイルドが出会ったなかで完璧な人生を送った二人の人物として、ヴェルレーヌと共に、亡命ロシア人のアナキストであるクロポトキンが讃えられていることもよく知られている。ワイルドのテクストの内容がアナキズムに接近しているものとしては、中国の莊子を非常に危険な思想家と呼び、そのアナキズム的な側面を指摘した書評 “A Chinese Sage” (1890) がある。だが何といっても、ワイルドのアナキズム的なテクストといえば、国家による統治を否定し、自発的なアソシエーションによってのみ実現される自由や個人主義を説いた “The Soul of Man under Socialism” (1891) だろう。じっさい、1891年2月に “The Soul of Man” が *Fortnightly Review* に發

表されてから5ヶ月後に、このテクストのフランス語要約版が“Individualisme”というタイトルで雑誌 *La Révolte* に掲載されたが、この雑誌がアナキズム系の雑誌であったことをみると、当時のフランスにおいても “The Soul of Man” はアナキズムの書として読まれる傾向にあったと考えられる⁴。

このようにワイルドとアナキズムとの関連性は否定しようもないのだが、ワイルドが言及するアナキズムを、同時代の流行に敏感だったワイルドが身にまとった外面的な「衣装」の一つに過ぎないとする見方も可能だろう⁵。したがって、ワイルドの唯美主義的な芸術批評論（以後、便宜上これを「ワイルド美学」と呼ぶ）とアナキズムとの、テクストに内在する——ワイルド自身の意図とは無関係に存在するかもしれない——関連性の有無を明らかにする必要がある。本稿では、政治的な、あるいは社会思想的な内容を含み、アナキズムを意識して書かれたと思われる “The Soul of Man” ではなく、ワイルド美学が全面的に展開される一方、表面的にはアナキズムとの関連性がみられない “The Critic as Artist” (1890) を取り上げ、ワイルド美学とアナキズムとの関わりについて考えてみたい。その際に手掛かりとなるのは、「行動、行為 action, act」という言葉と、“The Critic as Artist”において繰り返し登場する「観照 contemplation」というキー・ワードである。当時、直接行動を重視するアナキズムにおいて「行動」という言葉は、“propaganda by the deed”、つまり爆弾テロと結びつけられる傾向にあったが、ワイルドはこうしたテロ行為そのものには否定的だった⁶。ワイルドが精力的に執筆活動を行っていた1890年代前半において、“action” や “act” 等の言葉が爆弾テロを含意することがあったことを踏まえながらも、ワイルドのテクストにおける「行動」をより広い意味で捉える必要があるだろう。しかし逆にいえば、“action” 等の言葉は、ワイルド美学において政治とは無関係に使われているようにみえて、その裏に貼りついたアナキズムの痕跡を完全に消し去ることはできないということでもある。こうした歴史性を持つ “action” 等の言葉は、通常の理解と同様に、“The Critic as Artist”においても「観照」の対義語として使用されているようにみえる。しかし、ワイルド美学における「観照」と「行動」は、単純な対立関係に回収しきれるものではない。

*

以上の点を検討する前に、1880年代後半から1890年代にかけて、マラルメを中心とするフランス象徴主義文学とアナキズムとが密接な関係にあったことを簡単に振り返っておきたい。ワイルドから献呈された *The Picture of Dorian Gray* (1891) を読んだマラルメは、この作品が象徴主義の重要なドキュメントである

ことに気づいていただろう、そう Richard Ellmann が述べているように (Ellmann 319)、ワイルドとマラルメのテクストは——多くの相違点を含みながらも——広義の「象徴主義」という基本的な傾向を共有しているため、ワイルド美学における「観照」と「行動」との関係も、マラルメとアナキズムとの関係を踏まえてみたときにより明瞭に理解できるかもしれないからだ。

1890年代初頭のフランスにおいて、アナキズムの言説は前衛的な文学の領域を席巻しており、当時の象徴主義文学はこうした政治的文脈を考慮しなければ十分には理解できない、そう Richard Sonn は述べている (Sonn 6-7)。じつ、マラルメの主催する火曜会に出入りしていた文学者たちの中にはアナキズムを支持する若者も多かった（中畠 30）。とはいえ、当時の象徴派の文学者はみなアナキズムを信奉し政治的な内容の作品を書いていた、ということではない。アナキズムと象徴主義との主たる共通点は、個人主義の称揚、つまり、国家に縛られることなく自らの個性を発展させる自由意志を尊重する、ということにある (McGuinness 133-39; 川瀬 135-40)。例えば、象徴派を代表する文学の一人である Remy de Gourmont は、「象徴主義」と題された 1892 年のエッセイにおいて、「象徴主義は、審美的なものの系列における、審美的な個人の人格をめぐる自由な発展であると考えられるようになるだろう」と述べている⁷。また、必ずしも象徴派とはいえないが、小説家の Octave Mirbeau は 1893 年に次のように書いている。「アーネーとは [...] 個人を取り戻すことであり、正常で調和のとれた方向に個人が発展していく自由のことである」⁸。こうしてみてくると、アナキズムとフランス象徴主義との共通点が、ワイルドの “The Soul of Man” における重要な論点の一つと重なっていることが確認できる。“The Soul of Man”においても、自発的なアソシエーションによってのみ人間は自由であるという個人主義が説かれていたのだから。とはいえ、われわれの課題はワイルド美学における「観照」と「行動」との関係について考察することだった。フランスの文脈でこの関係を考えるには、アナキズムにおける「行動」の否定的な側面、すなわち爆弾テロが相次いで起きていたパリで、文芸の可能性について考え続けたマラルメの、まさしく「限定された行動 L'Action restreinte」と題されたテクストが示唆に富んでいる⁹。次の引用はこの作品の冒頭である。「一人の〈仲間〉が、この男、いつもそうなのだが、幾度となくやって来ては、行動する必要を私に洩らした。男の狙いは何だったのだろう…」¹⁰。マラルメの主催する火曜会に出入りしていたアナキズムを彷彿させる、〈仲間〉と呼ばれる男が洩らす「行動の必要」に対して、マラルメは行動に関する自身の考えを次のように述べる。

〈行動する〉とは、[...]哲学的にはこういう意味だったのだ、つまり、多くの人々の上に一つの運動を生起せしめること、そしてその運動がお返しとして君に、自分こそその原動力だった、だから俺は実在している、という興奮を与えてくれる、というわけだ。その運動については何よりも前以て自信を持っているわけではないのだから。ところで、この実践は二様の遣り方を意味する。すなわち、人の知らぬところで、生涯続く一つの意志によって、多様な輝きまでに達する——考える[penser]とはそういうことなのだ。さもなければ、一つの見通しのもとに、現在手の届くところにあるいろいろな捌け口、諸々の新聞やそれらの巻き起こす旋風がそれだが、そういう場で、[...]或る方向に向う一つの力を惹き起こしてみることだ。

(245-46; 214)

ここでマラルメは、「行動」という実践の一つの「遣り方」は「考える」ということだといっている。そして別の箇所では、「君の行為は常に紙に対してなされる(Ton acte toujours s'applique à du papier)」と述べ(246; 215)、その後に「[だから]書くことだ(Ecrire)」と記し(246; 215)、さらには、このテクストの末尾近くの、一語のみから成る断章で「刊行したまえ(Publie)」と説いている(251; 217)。以上の引用から、アナキストを思わせる「君」と呼ばれる男に対してマラルメが説く「行動」とは、「考える」、「書く」、「刊行する」という一連の動詞に「限定された」行動であることがわかる。そして、「行動」という能動的なユニットを形成する項の一つである「考える」という動詞が、次の引用では「受身となって観照する(pâter)」という動詞に言い換えられていることに注意したい。「繊細な人はだれでも、私はそうであって欲しいと思うのだが、受身となって観照に耽ってきたのだ(Un délicat a, je l'espère, pâti)」(249-50; 217)¹¹。考え、書き、刊行するという能動的で社会的な「行動」には、これを構成する一項として受動的で私的な「観照」が含まれているといえる。マラルメは「限定された行動」という散文テクストにおいて、能動的「行動」と受動的「観照」との対立的ではない関係に、アナキズムの直接行動とは異なる文学的「行動」によって詩人と社会とが接点をもつ可能性をみていたのではないだろうか。

*

以上のことを念頭において、ワイルドの“*The Critic as Artist*”における「観照」と「行動」との関係について検討しよう。まず一読して明らかなのは、このテク

ストにおいて、観照と行動とが対立関係に置かれ、かつ、行動が否定され観照が称揚されているということである。

Yes, Ernest: the contemplative life, the life that has for its aim not *doing* but *being*, and not *being* merely, but *becoming*—that is what the critical spirit can give us.... We might make ourselves spiritual by detaching ourselves from action, and become perfect by the rejection of energy.... To us, at any rate, the BIOΣ ΘΕΩΡΗΤΙΚΟΣ [BIOS THEORETIKOS, contemplative life] is the true ideal. From the high tower of Thought we can look out at the world. Calm, and self-centred, and complete, the aesthetic critic contemplates life....¹²

審美的批評家(aesthetic critic)の理想とは、行動(action)から自分を引き離し、〈思想〉という高い塔から世界、そして人生を観照する(contemplate)ことである、そう Gilbert は語る。ハンナ・アーレントはその著作『活動的生』において、近代に入り観照的生活よりも活動的生活が重視されるようになったと述べているが(アーレント 378-85)、ギルバートは発話内容の水準でこの傾向を転倒させようとしている。しかし、先ほどみたマラルメの散文作品を踏まえながら、“The Critic as Artist”で言われていること(発話内容)からだけではなく、その言い方(発話行為の様態)の水準で観照と行動を捉えるならば、両者の関係は必ずしも対立的ではないことがわかる。

ここで参考になるのは、ヤーッコ・ヒンティッカの「コギト・エルゴ・スムは推論か行為遂行か」という論文である¹³。

デカルトのコギト・エルゴ・スムにおいて問題となっているのは、「私はある」という文がもつ地位(不可疑性 indubitability)である。[...]逆のようにみえるが、デカルトがこの不可疑性を証明するのは、スムをコギトから演繹することによってではない。他方、「私はある」(「私は存在する」という文もそれだけでは論理的に真ではない。その文の不可疑性は或る思惟行為(an act of thinking)から、すなわち、その文を逆に思惟する試み(an attempt to think the contrary)から帰結する、とデカルトは理解している。デカルトのコギト・エルゴ・スムにおけるコギトという語の機能は思惟行為(the thought-act)を指示しているということであり、その行為を通じて

「私は存在する」の実在的自証性が明らかになる。このゆえに、この文の不可疑性は、精確に言えば思惟することによつては〔…〕知得はされない。むしろ、その文が不可疑なのは、それが現実の行為として(actively)思惟されるからであり、その限りにおいてである¹⁴。

ヒンティッカによれば、「私は存在する」ということが疑いえないのは、これとは逆の文「私は存在しない」をいま私が発話ないしは思考するとき、私は自分も含めて誰をも説得できないからである。注意しておきたいのは、「私は存在しない」という文の内容が不整合(inconsistent)なのではない、という点である。例えば、私が死んだ後、私の遺言状に書かれた「私は存在しない」という文を誰かが読み上げた場合、この文に何の不整合もないことを考えれば、それは明らかだろう。不整合になるのは、「私は存在しない」という発話あるいは思考を私が行うからであり、ヒンティッカはこの「私は存在しない」を「存在に関して不整合な文」、「自己破壊的な文」と呼んでいる。そして、この「存在に関して不整合な文」を否定する、「存在に関して整合的な(consistent)文」、つまり「私は存在する」を私が発話あるいは思惟するとき、その発話や思惟は、背理法によって正しく自己確証的となる。上の引用にある、「私は存在する」の不可疑性はその文を逆に思惟する試み(思惟行為)から帰結する、とは以上のような意味である。ヒンティッカによれば、デカルトのいう「コギト(我思う)」とは、たんなる思惟ではなく思惟行為(thought-act)である。それは、「私は存在しない」あるいは「私は存在する」と(心の中ないしは心の外で)思う—発話するという行為であり、この行為を遂行しつつ「スム(我在り)」を確証する行為遂行的発話(パフォーマティヴ)なのだ。

以上のようにヒンティッカは、デカルトのコギト(我思う)に潜む行為遂行性を明らかにした。それは一般化していえば、思惟行為を、「私」という存在を確証する(内面的ないしは外面向的)発話行為として捉えること、つまり思考における言語の行為遂行性を前景化している、ということである。思考する、あるいは観照するということ自体が、同時に行為遂行であるということ¹⁵。こうした観点から“*The Critic as Artist*”を読み直すならば、ギルバートのいう観照と行動との区別は自明なものではなくなる。

しかしこれからみるように、他ならぬ“*The Critic as Artist*”というテクスト自体が、観照と行動との区別を行は遂行的に無意味にしているのである。それは、ワイルドが“*The Critic as Artist*”を対話体で書いているという事実に起因する。観照と行動とを区別するギルバートの言葉は、アーネストに向けて發せられていく。

る。行動に対する観照の優位を説くギルバートの言葉は、アーネストを説得しようとする行為遂行的発話であり、こうした行為遂行的発話をを行っているときのギルバートは、観照する主体であるというよりも、発話行為の主体であり、「説得」という行動の主体となっている。ギルバートは、論文や批評の書き手が一般的にそうであるように、無時間的な世界で匿名の読者に向けて言葉を發しているのではない。アーネストという具体的な他者に向けて、時間の推移する演劇的設定の中で発話しているのである。ワイルドは、ギルバートとアーネストの対話が具体的な時間の流れの中で行われていることを強調している。テクストに即してみてこう。次の三つの引用はいずれも、みずからの芸術批評論を開陳するギルバートが話の途中で夜空に浮かぶ月を描写した台詞である。

Through the parted curtains of the window I see the moon like a clipped piece of silver. Like gilded bees the stars cluster round her. (136)

The night is too lovely for that, and the moon, if she heard us, would put more ashes on her face than are there already. (139)

But I see that the moon is hiding behind a sulphur-coloured cloud. Out of a tawny mane of drift she gleams like a lion's eye. (142)

上の最初の引用では、月は銀色であることから、天頂に近いところに位置していることがわかる。また、月のまわりに星が群がっているということは、月は雲に隠れていないということを示している。二番目の引用では、「月はいまよりもっと翳ってしまうだろう」といわれ、月がいま雲に隠れ始めたことがわかる。そして三番目の引用では、月が雲にかくれつつあることが明言され、さらには、月を隠そうとしている雲が硫黄色であることから、月そのものが黄色みを帯びている、つまり月が天頂から地平線に近いところに移動したということがわかる。また、この対話篇の終わり近くでギルバートは、“But the night wearies, and the light flickers in the lamp”(205)と語り、ランプの油もなくなり、芸術批評論に熱中していた夜が明けようとしていることを告げている。このように、月がしだいに雲に隠れ、夜空における月の動きがその色の変化によって示され、いつのまにか夜が明けようとしていることを示すことによって、行動に対する観照の優位性を説くギルバートが、推移する時間のなかで、具体的な行為として発話を行っていく。

いることが強調されているのである。

ギルバートはこうして、アーネストを説得しようとする行為遂行的発話を通じてその美学を説いているわけだが、ワイルドの代表的な作品のほとんどすべてにおいて同様のことが行われている。つまりワイルドは、自身の美学を一人称で匿名的な読者に向かって示すのではなく、行動する人物、或る作中人物が他の作中人物を説得するという行為遂行的発話によってその美学を示している場合がほとんどなのだ。例えば、*The Picture of Dorian Gray* (1891) では、ワイルド美学を思わせる“New Hedonism”が、ドリアンを感化しようとするヘンリー卿の発話によって示されていた。“The Portrait of Mr. W. H.” (1889)においても、シェイクスピアはウイリー・ヒューズであるという説が、相手を説得しようとする登場人物の遂行的発話ないしは手紙によって示されていた。“The Critic as Artist”と同様に対話篇である“*The Decay of Lying*” (1889) や書簡体で書かれた *De Profundis*についてはいうまでもないだろう¹⁶。

すでに述べたように、観照の美学は、アーネストの同意を求めるギルバートの行為遂行的発話によって説明されているため、観照すなわち〈思考〉に潜む行為遂行性が強調されている。こうした、行動と区別できない観照、あるいは観照と区別できない行動を、ヒンティッカのいう「思惟行為 thought-act」に倣って、「観照-行動 contemplation-act」と呼んでもよいだろう。ここで注目すべきは、“Let us go out into the night. Thought is wonderful, but adventure is more wonderful still” (136) というギルバートの台詞である。これは、ギルバートが観照の美学の核心を語る前の時点でのものである。行動に対する観照の優位を説く前の段階で、ギルバートは思考すなわち観照よりも冒險すなわち行動の方が素晴らしいといっているのだ。ギルバートは観照の美学を語る前から、この美学を相対化している。つまり、ギルバートは、観照と行動の区別を説き、何もしないで思考し観照することの重要性をアーネストに説きながらも、冒險を、行動をせずにはいられない人物なのだ。そうした人物の行為遂行的発話を通じて説明されているために、すでに述べたように、ギルバートが説く観照そのものが、行動と区別できない「観照-行動」といわざるをえないものになっている。それは、アナキズムのいう「直接行動」と重なる部分があるとはいえ、それとは別の「観照-行動」である。

そして、“The Critic as Artist”というテクストで驚嘆するのは、先ほどの引用でいわれていた“adventure”にギルバートが出かけようとするところでこのテクストが終わっていることである¹⁷。

But see, it is dawn already. Draw back the curtains and open the windows wide. How cool the morning air is! Piccadilly lies at our feet like a long riband of silver. A faint purple mist hangs over the Park, and the shadows of the white houses are purple. It is too late to sleep. Let us go down to Covent Garden and look at the roses. Come! I am tired of thought. (206)

このエンディングほど、“The Critic as Artist”的行為遂行性が露わになっているところはない。ここは一見すると、ギルバートが観照を否定あるいは放棄して行動に移行しているように見える。グリーン・パークを見下ろす、観照の美学が説かれていた書齋——「〈思考〉という高い塔」——から降りていこうというのだからなおさらそう思える。しかしここで想起すべきは、ギルバートが説いていた観照そのもの、あるいは観照の美学を語ることそのものが、行動と区別できない「観照-行動」であったことだ。このエンディングでギルバートは、「観照-行動」を放棄して純粹な行動へと移行したのではない。ギルバートがコヴェント・ガーデンに行くという行動に出るのは、薔薇の花を観に行くため、つまり観照のためなのだから。したがって、ここでのギルバートの行動も観照と区別できない「観照-行動」なのだ。つまりギルバートは、或る「観照-行動」から別の「観照-行動」へと移行しているというべきである。この飛躍、運動それ自体は、二つの「観照-行動」の差異として示されるほかはない¹⁸。しかもその飛躍は、ギルバート一人で行われるのではない。ギルバートは“Come!”と声をあげ、アーネストを別の「観照-行動」へと誘っているからだ。ギルバートが長々と語ってきた観照の美学ではなく、誘惑をともなうこうした飛躍にこそ、ワイルドの行為遂行的な美学の核心があるといえる¹⁹。

“The Critic as Artist”は、ギルバートの発話内容だけから判断すると、「行動」を否定し「観照」を称揚しているように思えたが、その発話内容にすら矛盾があることがわかった (“Thought is wonderful, but adventure is more wonderful still”)。他方で、その発話行為の様態に注目すると、観照と行動は互いに区別しがたい「観照-行動」というユニットを形成しているといえた。そして、或る「観照-行動」から別の「観照-行動」への誘惑をともなう飛躍は、“The Critic as Artist”が特異的に示している「出来事」であり、ワイルド美学の要諦である。こうした「出来事」が、当時の爆弾テロという出来事を反映しているのか否か断定はできないが、マラルメのいう「書く」という「限定された行動」によって、ワイルドは、アナキズムの希求する自由をテクスト内の「飛躍」という出来事として実現している。

* 本稿は、日本ワイルド協会第40回大会（2015年12月5日に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催）における口頭発表で読まれた原稿に加筆修正を施したものである。なお本研究は、JSPS科研費25244014（基盤研究（A））の助成を受けたものである。

注

- 1 ハイマーケット事件については、ウドコック 第14章およびMesser-Kruse を参照。
- 2 この点についてショーは次のように記している。“The only signature I got was Oscar's. It was a completely disinterested act on his part; and it secured my distinguished consideration for him for the rest of my life” (Shaw 403)。
- 3 ワイルドによる回答の原文は次のとおり。“Autrefois, j'étais poète et tyran. Maintenant je suis artiste et anarchiste” (*L'Ermitage*)。
- 4 川瀬を参照。また、川瀬によれば、マラルメはこのアナキズム系の雑誌の定期購読者だった。
- 5 Josephine Guy は、当時耳目を集めている個人主義のセンセーショナルな側面に着目したワイルドが“entertainment”として書いた読みもの、それが“The Soul of Man under Socialism”であると述べている。Guy 73 を参照。
- 6 ワイルドは、雑誌 *The Theatre* の第23号（1894年3月発行）に掲載されたインタビューにおいて次のように語っている。“I think I am rather more than a Socialist,’ he added, laughingly; ‘I am something of an Anarchist, I believe; but, of course, the dynamite policy is very absurd indeed” (Almy 232)。
- 7 原文は次のとおり。本文中の和訳は引用者による。“[L]e Symbolisme pourra (et même devra) être considéré par nous comme le libre et personnel développement de l'individu esthétique...” (Gourmont 322-23)。
- 8 原文は次のとおり。本文中の和訳は引用者による。“L'anarchie... est la reconquête de l'individu, c'est la liberté du développement de l'individu, dans un sens normal et harmonique” (Mirbeau 173-74)。なお、この Mirbeau のテクストと先に引用した Gourmont のテクストに関する情報は川瀬の論文より得た（川瀬 138-39）。
- 9 “L'Action restreinte” は、まず1895年に雑誌 *La Revue blanche* に“L'Action”というタイトルで発表され、その後1897年に刊行された *Divagation* に現在のタイトルで収められた。
- 10 “L'Action restreinte” (Mallarmé 214)。邦訳版 245-46。本文中の和訳は『マラルメ全集II』（1989年）を使用しているが、訳語を変更した部分がある。以後、“L'Action restreinte”からの引用は、まず邦訳版のページ数を記し、その後にフランス語原典からの引用ページ数を記す。
- 11 ここでマラルメが使用している“pâtir”という動詞は、“contempler”（観照する）とほぼ同義である。
- 12 Wilde 178-79. 以後、“The Critic as Artist”からの引用はページ数を本文中に記す。
- 13 ここでデカルト論を参照するのは唐突に思えるかもしれないが、アーレントは先

に言及した著作で次のように述べている。「近代の数ある発見のもたらした帰結のうちでも、アルキメデスの点の発見とそこから生じたデカルトの懷疑からただちに出てきた結果だけに、精神的に最も重大な帰結であったのは、おそらく、観想的生と活動的生との伝統的な位階秩序の転倒であろう」(アーレント 378)。ここからわかるように、近代における観照（観想）と行動（活動）との関係を考える際してデカルトに言及するのはそれほど突飛なことではない。

14 Hintikka 15-16 (ヒンティッカ 27頁)。本文中の和訳は邦訳版を使用しているが、訳語を変更した部分がある。

15 ヒンティッカは、「見る」などの感覚的な行為も思惟行為の一様態であると述べている (Hintikka 31-32)。そして、マラルメのテクスト「限定された行動」において、思考する (penser) が観照する (pâtir) とほぼ同じ意味で用いられていたことを想起されたい。

16 注5で言及した Guy がいうように、“The Soul of Man under Socialism”がエンターテイメント性の高い読み物として書かれたとすると、このテクストも先に挙げたワイルドのテクストと同様に行為遂行性が高いといえる。なぜならば、そうした読み物は、読者を楽しませるという行為を遂行できるか否かが（通常の評論文よりも）重要な問題となるからである。なお、*De Profundis* における行為遂行性については鈴木を参照。

17 中山徹もこのテクストのエンディングについて驚嘆している（中山 45）。ただし、このエンディングに関する中山の解釈は、ここでのギルバートが「観照的な生」を放棄していると捉えている点において、本稿の解釈とは異なる。

18 この「飛躍-差異」は、注12の引用でいわれていた“becoming”に相当する。

19 ワイルドの場合、他者を「説得する」という行為遂行的発話によってその美学を示している場合がほとんど”であると先に述べたが、さらに言えば、この文脈での「説得」は「誘惑」に等しい。つまりそれは、論理的に相手を納得させようとするだけではなく、あらゆる言語的戦略を駆使して相手の同意を得ようとしている。そうした言語的戦略には、常識から逸脱した逆説を弄して相手の気を惹いたり、卑下してみせて同情を誘ったり、脅迫まがいの言葉で懇願したり、欲望を理想化する相手のナルシシズムにつけ込んだりする (Felman 16-8) など、さまざまなやり方がある。そして、ワイルドのテクストにおいてこうした誘惑が成功する場合、なぜそれが成功したのか具体的な理由が示されないため、誘惑された相手の変心は、読者の目にはある種の「飛躍」と映る。例えば、*The Picture of Dorian Gray*において、ヘンリー卿が説く“New Hedonism”にドリアンがいつのまにか染まっていたこと、また、“The Portrait of Mr. W. H.”においては、「ウェイリー・ヒューズ説」を信じてそれを相手に説いていた人物が突然この説を捨て去り、他方で「ウェイリー・ヒューズ説」を頑なに否定していた人物が特別な理由もなくあるときからこれを信奉するようになるといった、「回心」ともいるべき「飛躍」が生じたことなどを想起されたい。“The Critic as Artist”的場合は、誘惑される側ではな

く誘惑する側において、ある「観照・行動」から別の「観照・行動」への気まぐれな「飛躍」が生じているという点で先の二例とは異なる。しかし、「ワイルド美学」への誘惑と「飛躍」という出来事とが密接にかかわっているという点においては一貫している。

《引用文献》

- Almy, Percival W. H. "New Views of Mr. Oscar Wilde." *Oscar Wilde: Interviews and Recollections*. Vol. 1. Ed. Mikhail, E. H. London: Macmillan, 1979. 228-35. Print.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. New York: Vintage, 1987. Print.
- Felman, Shoshana. *The Scandal of the Speaking Body: Don Juan with J. L. Austin or Seduction in Two Languages*. Trans. Catherine Porter. Stanford: Stanford UP, 2003. Print.
- Gourmont, Rémy de. "Le Symbolisme." *La Revue blanche*. Jun. 1892: 321-25. Print.
- Guy, Josephine M. "'The Soul of Man under Socialism': A (Con)Textual History." *Wilde Writings: Contextual Conditions*. Ed. Joseph Bristow. Toronto: U of Toronto P, 2003. 59-85. Print.
- Hintikka, Jaakko. "Cogito, Ergo Sum: Inference or Performance?" *The Philosophical Review* 71 (1962): 3-32. Print.
- L'Ermitage: Revue Artistique et Littéraire*. Jul. 1893: 21. Print.
- Mallarmé, Stéphane. *Œuvres Complètes*. Vol. 2. Ed. Bertrand Marchal. Paris: Édition Gallimard, 2003. Print.
- McGuinness, Patrick. *Poetry and Radical Politics in fin de siècle France*. Oxford: Oxford UP, 2015. Print.
- Messer-Kruse, Timothy. *The Trial of the Haymarket Anarchists: Terrorism and Justice in the Gilded Age*. New York: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Mirbeau, Octave. "Preface to La Société mourante et l'anarchie." Reg Carr. *Anarchism in France: The Case of Octave Mirberu*. Manchester: Manchester UP, 1977. 172-74. Print.
- Shaw, Bernard. "My Memories of Oscar Wilde." *Oscar Wilde: Interviews and Recollections*. Vol. 2. Ed. Mikhail, E. H. London: Macmillan, 1979. 399-411. Print.
- Sonn, Richard. *Anarchism and Cultural Politics in Fin de Siècle France*. Lincoln: U of Nebraska P, 1989. Print.
- Wilde, Oscar. "The Critic as Artist." *The Complete Works of Oscar Wilde*. Vol. 4. Ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007. 123-206. Print.
- アーレント, ハンナ『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015年。
- ウドコック, ジョージ『アナキズム・Ⅱ運動篇』白井厚訳、紀伊國屋書店、2002年。
- 川瀬武夫「マラルメとアナキズム」『ユリイカ』9月臨時増刊 総特集ステファヌ・マラル

- メ』青土社、1986年9月、128-53頁。
- フェルマン, ショシャナ『語る身体のスキヤンダル——ドン・ジュアンとオースティン、あるいは二重言語による誘惑』立川健二訳、勁草書房、1991年。
- 鈴木英明「行為としての批評」『オスカー・ワイルド研究』7 (2006): 1-13。
- 中畠寛之『世紀末の白い爆弾——ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』水声社、2009年。
- 中山徹『ジョイスの反美学』彩流社、2014年。
- ヒンティッカ, ヤーッコ「コギト・エルゴ・スムは推論か行為遂行か」小沢明也訳、『現代デカルト論集Ⅱ 英米篇』デカルト研究会、勁草書房、1996年、11-53頁。
- マラルメ, ステファヌ『マラルメ全集Ⅱ ディヴァガシオン 他』松室三郎ほか訳、筑摩書房、1989年。